

# 令和6年度 自己評価計画

							石川県立明和特別支援学校					
重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考					
1	授業力向上(学習グループに応じた教科指導)	①	知的障害の程度が重い児童生徒の授業づくりを学校研究で取り上げ、学部や類型等、学習グループに応じた実践を行う。全校体制で取り組み、指導力の向上を目指す。	研究研修課 各学部	本校は、児童生徒の実態に応じた教育課程を編成し、授業を行っている。昨年度までは、学校研究で主に知的障害の程度が軽い児童生徒を対象に教科指導の充実を図ってきた。今年度から、知的障害の程度が重い児童生徒を対象に、「どの子ども深く学ぶ授業づくり」をテーマに授業研究を推進する。対象の学習グループを担当していなくても、知見を自身の指導に引き寄せて捉え、学校全体で授業力の向上を図る必要がある。	【成果指標】 学校研究をとおして、自らの学習グループにおける授業力を向上させる。	学校研究の研究授業に係る取り組みを、自らの学習グループにおける教科指導に活かすことができた。 A: あてはまる B: ややあてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	【A+Bが80%以上で達成】	評価者: 教員 9月: アンケートで判定 10月: 中間評価分析 12月末: 9月同様のアンケートで判定し、最終評価分析			
		③		各学部		【満足度指標】 学校は学習グループに応じた教科指導を行っている。				授業参観や日々の児童生徒の様子、通信やHPなどから、学校は学習グループに応じた教科指導を行っている。 A: あてはまる B: ややあてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	【A+Bが80%以上で達成】	評価者: 保護者 9月: アンケートで判定 10月: 中間評価分析 12月末: 9月同様のアンケートで判定し、最終評価分析
2	安全・安心な学校(大規模災害を想定した危機管理体制の整備、防災教育)	①	大規模災害に備え、防災士等の助言を得て、危機管理体制の整備を行う。また、児童生徒に対する防災教育を見直し、効果的な取り組みを行う。	全職員	毎年、災害に備えた避難訓練や保護者への引き渡し訓練等を工夫しながら実施してきた。しかし、能登半島地震を踏まえ、新たに防災士等の外部専門家を計画的に招聘し、適切な避難行動の確認や役割分担、大規模災害時の初動体制に関する助言を得て、体制を改善していく必要がある。	【成果指標】 防災士等のアドバイスを 得て、避難訓練の見直しを行う。	防災士等による避難訓練の助言を受けて、避難行動や防災教育に関する知識を整理することができた。 A: あてはまる B: ややあてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	【A+Bが90%以上で達成】	評価者: 教員 6月: 避難訓練で防災士から助言を得て改善 8月: アンケートで判定 10月: 中間評価分析 11月: 避難訓練で再度防災士の助言 12月末: 同様のアンケートで判定し、最終評価分析			
		②		防災安全委員会		【成果指標】 防災士等のアドバイスを 得て、危機管理体制の見直しを行う。				8月の災害対応研修を活かし、大規模災害時の危機管理体制の見直しを行うことができた。 A: あてはまる B: ややあてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	【A+Bが90%以上で達成】	評価者: 教員 8月: 研修アンケートで判定 10月: 中間分析 12月: アンケートを実施、最終評価分析
		③		各学部		【満足指標】 学校は、安全・安心な学校運営に取り組んでいる。				通信やHPなどから、学校が危機管理体制の整備を行ったり防災教育を行ったりしている様子が表れている。 A: あてはまる B: ややあてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	【A+Bが90%以上で達成】	評価者: 保護者 9月: アンケートで判定 10月: 中間評価分析 12月末: 9月同様のアンケートで判定し、最終評価分析
3	小中高等部のつながりのある教育(教科連携会議)	①	教科連携会議を有効に働かせ、学習指導要領をもとに、小中高等部で系統的な指導ができるよう学部縦断で内容等の見直しを行い、成果を各学部の指導に活かす。	研究研修課 全学部	年4回の教科連携会議を設定して6年目となる。教科担当者ごとに、指導内容の確認や整理を行う場として一定の成果が見られた。今後は、年間指導計画における題材の位置づけ、指導内容の工夫等を検討し、各教科の系統性を踏まえた指導の見直し等に活かすことが求められる。	【成果指標】 各教科ごとに、小中高等部の指導内容を見直すことで、自らの教科指導に活かすことができる。	教科連携会議をとおして、系統性のある指導計画や指導分野・内容を見直すことができ、今後の指導に役立つ会となった。 A: あてはまる B: ややあてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	【A+Bが80%以上で達成】	評価者: 教員 9月: アンケートで判定 10月: 中間評価分析 12月末: 9月同様のアンケートで判定し、最終評価分析			
4	業務改善(業務の円滑化、効率化)	①	前例踏襲で業務を遂行するのではなく、円滑化・効率化の視点から、部署ごとに業務内容を見直したり、部署間で課題を共有したりして、業務の改善を図っていく。	各学部 各課(7) 教育相談部 自立活動部 県特研事務局	これまで、ICT機器を活用することで業務効率が上がったり、データのやり取り等が容易になったりするなど成果が見られる。一方で、前例踏襲が進められる業務があり、業務そのものが必要かどうか、手続きを円滑化・効率化できないか等の見直しを進め、改善していく必要がある。	【成果指標】 一つ一つの業務について常に見直す意識をもって取り組み、必要度や業務遂行方法の見直しを行うことで業務の円滑化、効率化を図る。	業務の円滑化・効率化を目指し、業務を見直す意識をもって取り組んだ結果、改善につながることができたり、次の課題が明確になったりした。 A: あてはまる B: ややあてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	【A+Bが80%以上で達成】	評価者: 教員 9月: アンケートで判定 10月: 中間評価分析 12月末: 9月同様のアンケートで判定し、最終評価分析			